

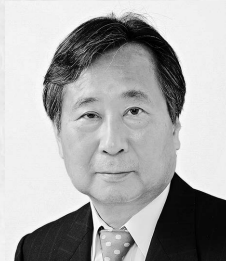
化学教育 徒然草

新型コロナウイルスと 化学教育

NISHIHARA Hiroshi

西原 寛

東京理科大学総合研究院 教授
元副会長・教育普及部門長



巻頭言

本誌の2012年3月号の徒然草に「東日本大震災と科学教育」を寄稿した。大地震と福島第一原発事故から1年しか経過していない当時の問題として、深刻な科学・工学不信の現状は日本の未来にどのように影響するのか、子供たちが将来、科学や工学に関わってこの国を支えてくれるだろうか、という危機感を述べた。原発の廃炉には途方もない時間がかかるが、子供たちの科学に対する不信はかなり払拭されていると信じたい。

あの大震災に匹敵する危機には二度と遭遇しないだろうと高を括っていたら、9年後の今年、中国で発生した新型コロナウイルス（COVID-19）が我が国だけでなく、世界中に未曾有の大害をもたらしている。今年7月の国際化学オリンピック（IChO）トルコ大会は、現地開催が中止になり、オンラインでの大会となった。当然、実験試験と筆記（理論）試験のうち、筆記試験しか行われていない。トルコ大会は、来年7月に近畿大学で開催予定のIChO日本大会に大いに参考になるはずだったが、その目論見は外れた。さらに今夏に開催予定だったアスリートの東京オリンピック・パラリンピックが1年延期となり、IChO日本大会と日程が重なってしまう。今のウイルス感染状況が続けば、日本大会もオンラインでの開催になることも考えられる。この不確定な状況の中、日本開催に向けて、国際化学オリンピック日本委員会ではオンライン会議を多用しながら、問題作成を進めている。

我が国では1カ月半におよぶ緊急事態宣言が5月26日に解除された。ただ、第2波も現在進行中で以前の生活に戻ることは許されず、感染のリスクを抑える新しい生活方式が求められている。厄介なのは、その新方式がいつまで続くのか予測できず、ボディーブローのように効いてくることだ。教育、特に化学を含む自然科学の教育のやり方への影響も心配だ。探究学習には実験や野外実習が重要なので、いわゆる対面型の授業を止めるわけにはいかない。どのように安全に行うのかに先生方は頭を悩ませていることだろう。さらに、初等、中等、高等教育の接続に関する大きな仕組みにも影響が及ぶことになろう。それを打開するには多くの知恵を結集する必要がある、本誌や日本化学会の果たすべき役割は極めて大きい。

[連絡先]

278-8510 千葉県野田市山崎 2641 (勤務先)